

2枚目の名刺を持つ

企業「副業解禁」の本音  
お金と法律で失敗しない

皇室の少子高齢化  
魅惑の裏ハワイ

# AERA

19.5.20 No.22

AERA 定価 390円

創  
株式会社

【巻頭特集】

2枚目の名刺で  
「仕事」に縛られない

# 演奏で深めた各国交流

プロ顔負けのピアノの腕を持つ外交官がいる。OECD日本代表大使で、日本人としては24年ぶりにIEAの議長を務める大江博さんだ。

今年3月、外交官でありながらピアノニストの顔を持つ大江博さん(63)は、難関として世界的に知られる「パリ国際アマチュアピアノコンクール」に出場、100人近い参加者の中を勝ち進み、陰影に富むシヨパンで第5位入賞を果たした。

大江さんは36カ国が加盟する経済協力開発機構(OECD)の日本政府代表部大使としてパリに赴任、日本人としては24年ぶりに国際エネルギー機関(IEA)理事会の議長を務める。トランプ米政権の動向などでエネルギー政策の見通しが不透明となり、難しいかじ取りを任せられたなかでの快挙だった。

## アーミテージも感嘆

大江さんがピアノを始めたのは5歳のときだ。「将来は音大へ」と思っていたが、17歳の時に東大受験を決意してピアノを中断した。東大入学後は実家に帰省した際に触る程度、卒業して外務省に入省すると仕事で頭



「パリ国際アマチュアピアノコンクール」のファイナル会場、ソルボンヌ大学大講堂で演奏を披露する大江博さん

く気にはなれなかった。それでもときには数カ月間、ツスン再開を試みたり、晩餐会で演奏を披露することもあった。外交官は、仕事を離れた交際の場も多い。先輩からも「職場と家の往復だけの人は、良い外交

官になれない」と言われたが、実際、ピアノの演奏が外交に役立つと感じることも多かったという。「40代前半、米国の日本大使館に勤務していたとき、その後国務副長官になったR・アーミテージ氏を自宅に招待し、ピアノを聴いていただいたことがあります。12、13年後、アメリカへ出張した際に彼に面会を申し込んだら、すぐ食事に招待してくださった。私のことなど覚えていないだろうにと不思議に思ったら、『あなたのピアノは一生忘れられませぬよ!』と。ピアノ演奏は、ただ食事を共にするのは違うのですね」

とはいえ練習時間を確保するのは難しく、本格的にレッスンを再開したのは50歳のとき。外務省を退職して東大教授に就任し、まとまった時間ができたことがきっかけとなった。

## 自身の演奏でもてなし

だが2年後、国際協力局参事官として外務省に戻ることに。また弾けなくなつてはいけなく、今度は朝6時に起床して出勤前に1時間半ピアノに向かい、週末は1日5時間ほど練習した。この練習量は、現在も平均して保っている。

「その気になれば時間は作れます。人生に仕事と違う世界に没頭する時間は必要ですし、仕事以外に情熱を注ぐものを持つ人には『また会いたい』と思わせる何かがある。それが結果として、仕事にもつながっていくのだと思います」

現在、パリの公邸で週3回は



日本代表としてIEA理事会に参加する大江さん(中央)。現在は議長として各国の調整役を担う

ど主催する晩餐会は、大江さんの演奏で開始する。欧米人には音楽愛好家が多く、「アンバサダーピアノニスト」の演奏は、注目の的となっている。OECD内でも、大江さんのピアノは有名だ。

「コンクールの時は、各国の大使や事務局の方々が予選の結果をネットでチェックしていて、通過するとお祝いのメッセージが届くんです。今回は決勝の翌日早々、グリアOECD事務総長から『結果はどうだった?』という電話がかかってきましたよ」

音楽好きな妻の支えもある。「彼女は自称『マネージャー』です。先生から受けた注意を忘れてはいけなく、レッスンと一緒に来て録画してくれるんですよ」

次の舞台は9月、公邸でベルリン・フィルのチェリストとの共演が待っている。

ピアノニスト 音楽ライター 船越清佳